

太陽と生きる家

高知工科大准教授 渡辺菊真



わたなべ・きくま 71年奈良県生まれ。高知工科大准教授、建築家。「A+A Awards 最優秀賞」(米国、15年)など受賞。奈良に8月完成した「宙地の間」は、国際的な建築分野のウェブサイト「ArchDaily」に掲載され、各国の建築雑誌の取材も受けている。

太陽のことを思い返してみよう。冬の寒い日に見つけた陽だまりの温かさ。キラキラ照りつける夏の日の、木陰と駆け抜ける風の涼やかさ。夜の闇を破って日の昇る時のまぶしさ、すべてをオレン

ものだろう。太陽といえはソーラーパネルが思い浮かぶが、そんな機械でなく、もっと素朴な工夫で太陽の恵みを授かることはできないだろうか？ それが可能な技術が、「パッシブ(受動的)ソーラーハウス」である。

ス。夜にしつかり換気をして涼しい風をとりいれ、その冷気を蓄えておき、翌日の日中はその冷気の恩恵にあずかればよい。

る。宇宙的な存在としての太陽を感じ、それを敬う。こんな日時計のある家を、今年の夏、奈良に作り上げた「宙地の間」と命名。緯度の傾きを持つ屋根の下に大きな円弧を描く日時計。その南には明るい居間や食堂、北には薄暗くも落ち着く書斎、東西2階には朝と夕を感じられる個室が浮かぶ。まさに一日中、一年中、太陽の

ジ色に染める夕日の懐かしさ。私たちの風景は、想えば太陽と深くかかわっている。太陽の恵みを受けて、太陽の大きさを知る。そのことで自然を慈しみ、敬いながら生きていく。そんな場所を建築できないだろうか？ そんなことをずっと考え続けて来た。

まず寒い冬。できればポカポカした日差しをたくさん受け入れたい。そこで南に大きな窓を設け、日射を受け入れ熱を蓄える。蓄

もちろん、これだけの工夫では望ましい温暖環境が得られない日もある。その時は必要最小限だけ冷暖房を使えばよい。このように可能な限り自然の恵みを機械なしに受け入れる、省エネルギーの建

また近年のゲリラ豪雨にいつ襲われるかわからない。そんな時、安全かつ快適に過ごせる拠点は、何より必要である。

電気、ガスが機能しない場合は建物だけの性能で厳しい気候に向き合わねばならない。太陽の恵みを建築的な工夫で最大限受け入れることができるパッシブソーラーの技術は極めて有効である。

「恩恵」最大限受ける工夫

屋内に日時計 地域拠点にも

太陽の恵みを受け取る建築。それはどんな

築ができるのだ。しかし、それだと太陽が都合のよい「空調機器」に見えてしまい、その偉大さを貶めてしまう。感動する風景とともにある、大きな巡りとしての太陽。それを感じて過ごしたい。そこで屋内に日時計を設置する。刻々とその軌跡を刻む日時計は太陽が一日を通して巡るさまが目に見え、時の流れを感じさせてくれる。二階の核として、

また、不安に打ち震えている時、心の拠り所となる大きな存在とともにありたい。太陽の宇宙的な大きさ、温かきを見せられる日時計はそんななかの守り神のように感じられるかもしれない。太陽と過ごす最も根源的な場所。心に響く、安心安全な拠点を想う時、ひとつの在り方として有効なのではと、考えている。



「宙地の間」2階の日時計。白幕にトップライトから注ぐ光の帯が時間を示す。内観は現地材の吉野杉をふんだんに使用(奈良県生駒郡)